

平成23年度「重点研究費」研究成果報告書

| | | | |
|------|------------------------------|-----|-----------|
| 申請区分 | C | 配分額 | 200,000 円 |
| 研究課題 | 知的障害児の行為の実行・抑制の特性解明と教育実践への応用 | | |

研究代表者

| | | |
|---------|------------------------|--------|
| 氏名 奥住秀之 | 所属 総合教育科学系 特別支援科学講座 | 職名 准教授 |
|---------|------------------------|--------|

研究分担者

| 氏名 | 所属 | 職名 |
|----|----|----|
| | | |
| | | |

【研究成果の概要】 (文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字)

知的障害児・者に身体運動機能の制約があることは、彼らの系統的研究が始まったころから注目されている。特別支援教育時代においても、彼らの運動指導・支援は重要な教育的テーマの1つとなっている。

知的障害児・者の運動機能に関する古典的な研究を概観すると、同一年齢段階の健常児・者よりも機能が全般的に低下していること、知的機能や精神年齢が高い者は運動機能も高い傾向にあること、平衡機能(バランス)や協調運動等で特に機能低下が著しいこと、知的障害の類型のうちダウン症者は特に低い成績を示しがちであること、自閉症を伴う知的障害児・者は独特の運動困難を示すことなどが指摘されてきている。

こうした研究の多くが運動の実行の側面を検討しているが、中には抑制的側面に注目したものも散見される。古くは、旧ソ連の神経心理学者のルリヤによる言語の行動調整機能の検討が有名であるが、こうした機能は、今日の認知科学では実行機能(遂行機能)と呼ばれる。最近、知的障害研究の専門誌である Journal of Intellectual Disability Research(以下、JIDR)が、「知的障害児・者におけるワーキングメモリと実行機能」という特集を2号にわたって組むなど、知的障害児・者の実行機能に注目が集まりつつある。

本研究は、知的障害児・者の身体運動を実行と抑制の側面に注目したものである。研究の遂行にあたっては、3つのトピックを設定し、このテーマに関心のある3人の大学院生の協力を得た。1つ目は、大学院生の平田正吾の協力を得て「知的障害児の運動行為遂行の特徴とその心理学的解析」というテーマである。知的障害児の運動の実行が、速度や強さの側面よりも、正確性や安全性を優先させる戦略をとっていること、それが認知スタイルともよくつながっていること、さらには彼らの性格特性までも関連していることなどを指摘した。

2つ目は、大学院生の池田吉史の協力を得て「知的障害児における行為の実行・抑制と実行機能」というテーマである。実行機能は近年の知的障害認知心理学の重要なテーマとなっており、その中でも抑制機能が注目されている。抑制機能の検討パラダイムとして、葛藤反応を検討するストループ様課題のほか、反応抑制課題など、いくつかの非言語的タスクがあることなどを検討した。

3つ目は、大学院生の前田航の協力を得て「固定物支持がある際の知的障害児・者の身体動揺と行動調整能力との関係」というテーマである。人は直立姿勢を保持しているとい、じっと静止しているわけではなく、常に微細な動揺を繰り返している。これが身体動揺で、これの大小をバランス能力の指標にするという、きわめて客観的かつ定量的なアセスメントである。そして、ただ単に起立するよりも、固定物に接触している方で姿勢が安定するということを明らかにした。これはバランスの教育支援のヒントを含むものである。

本研究により、知的障害児・者の運動機能の基礎的理解と教育実践に結び付く知見が一定得られたと考えられる。

研究成果発表方法

いくつかの学術雑誌で関連する研究を報告し、さらに3月15日付で報告書「知的障害児の行為の実行・抑制の特性解明と教育実践への応用」を作成した。